# 「ごちゃまぜな空間」をつくりたい

## ～「精神障がい者ソフトバレーボール体験会」を通して～

## 体験会主催者へのインタビュー

### 体験会を開くきっかけは？

杉田　私自身は子どもの頃から足が不自由でした。バレーボールに参加する機会もありませんでした。でも精神障がい者バレーボールチーム「チューずdayず」の練習試合を見に行ったときに、両チームが励まし合ってプレーを楽しむ様子を見て、もっといろいろな人が集って同じ空間でバレーボールができればと思いました。

### どのような体験会を目指したか

杉田　私はこの体験会を、多様な人々が集える、「ごちゃまぜな空間」にしたいと思っていました。でも、そのイメージが細野さんや実行委員会の人になかなか伝わりませんでした。だからこそ、分かり合えるまで対話することが大事だと思いました。

細野　杉田さんから「中学校の体育館で開催したい」「地域の子どもや大人も参加できる場にしたい」と聞いた時、私はそのことに何の意味があるのか理解できませんでした。なぜなら私は「障がいがある人たちとサポートする人たちが交流できる場が作れたらいい」と思っていたからです。でも「学生時代はバレーボールの授業に参加する機会もなかったし、参加しても周りの人に迷惑をかけると思ってきた」という杉田さんの思いを知ったとき、私が考えていた形では、共に生きる社会にはつながらないと感じました。そして、杉田さんの言う多様な人々が集える「ごちゃまぜな空間」をみんなで一緒につくっていけたらと思いました。

ぴあサポートみえ
細野晶代さん(左)、杉田宏さん(右)

杉田　皆さんの中には「障がい者と一緒に」と言うと、身構えてしまう人もいるかもしれません。また、障がい者の中には、人と関わることに不安や戸惑いを感じる人もいると思います。それでも、体験会では多様な人々が集い、バレーボールを楽しむことができました。一緒にバレーボールをすることを通していろいろな人が関わり合うことで、お互いを理解する入り口になったのではないかと感じています。

## 参加者の声

- いつも部活でやっているバレーボールとはまた違って、新鮮でとてもおもしろかったです。
- 参加してみて、見たり聞いたりするだけでは、その一面でしかとらえられないこと、直接話をしたり、バレーボールという活動などを通して交流したりすることで理解が進み、自分自身にとっての糧になるということを改めて実感しました。
- 「なんとかサーブを入れられるようになってほしい」「チームメイトとして一緒に楽しみたい」「頑張ろうとしていることを応援したい」といった気持ちが、本当の意味で相手に寄り添い、共に生きていくことにつながるのではないかなと思いました。
- 体験会に参加する前は、正直「どうしたらいいんだろう」「どんな人たちがいるんだろう」という不安や構えた考えを持っていました。一緒にプレーしていて、相手のことを知らなかったことがそのような気持ちにつながっているのだと気付きました。
- 日本のことは大好きだけど、たまに息苦しく感じたり、周りの目線が気になったりします。でも今日のイベントの皆さんはとても優しくて楽しく、おかげさまでリラックスできました。